

『伊勢物語』の歌の手法について

— 新しい歌語の創造性 —

鎌 田 清 栄

はじめに

『伊勢物語』を読んでいると、言葉の表面上の意味は分かるが物語の内容が明確に掴めない、という箇所が多々ある。その理由は、文章表現上の問題などいろいろ考えられるが、ひとつには各話の中心に置かれている歌の言葉遣いが、同時代の常套から外れているところからきているのではないかと思われる。その外れ方を見極めないと、『伊勢物語』の本来の姿は見えてこないであろう。

そこでまず、『伊勢物語』の作中歌のいくつかについて、その歌が何に依拠しているかを、前後の作品と比較検討することによって調べてみたい。次に、依拠した既成の言葉遣いを『伊勢物語』がどのように外していくのか、また、それが『伊勢物語』の本質にどのように係わっていくのかを探ってみたい。

『伊勢物語』（現行の形）の成立年代の下限を天曆年間（後撰集

成立）前後と見て、それまでの勅撰集、私撰集、私家集、歌合、それと『万葉集』を比較検討の対象とする。それ以降の作品は、『伊勢物語』が影響を受けなかったであろうと思われるので、一応対象外とする。

一、「春日野の若紫のすりころも」

初段の初冠したばかりの男が、春日の里へ出かけて「なまめいたる女はらから」をかいま見て詠んだ歌、「春日野の若紫のすりころものぶの乱れかぎり知られず」は物語文によると、「みちのくののぶもぢずり誰ゆゑに乱れせめにしわれならなくに」という源融歌に趣向を蓄ったものであるという。「みちのくのしのぶもぢずり」が三句以下の序詞であるのと同様に、「春日野の若紫のすりころも」は「しのぶの乱れかぎり知られず」の序詞と考えられる。

序詞は歌の言葉を導き出すためのものだから、使い慣らされた言

葉遣いの方がわかりやすい。例えば、『古今集』の「ほととぎす鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな」（四六九）の序詞、「ほととぎす鳴くや五月のあやめぐさ」は、「ほととぎす」といえば「五月」、「五月」といえば「あやめぐさ」と続く詠み方が『万葉集』以来使われてきたので、それに則って「あやめも知らぬ」が導き出されている。

*……ほととぎす鳴く五月にはあやめ草花橘を玉に貫きかづらに
せむと……／万葉集四二六（新編国歌大観番号、以下同じ）

*ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉に貫く日をいまだ遠みか／

同一四九四

*五月雨に乱れやせましあやめ草あやなし人もいかが忘れぬ／躬

恒集四四三

*ほととぎす声ききしよりあやめ草かざす五月としりにしものを／

貫之集二二八

ところが「春日野の若紫のすり衣」といういい方は、「春日野」「若紫」「すり衣」の間に、言い慣らされた関連性がないのである。「春日野の若紫」はこの初段に初出以後、『京極御息所歌合』（九二一年）に例を見るだけである。この歌合については後に詳しく述べるが、平安時代は「春日野の」といえば、「若菜」または「若草」と詠まれるのが大方であった。

*春日野に若菜つみつつよろづ世をいはふ心は神ぞしるらむ／素

性集三七

*年ごとに若菜つみつる春日野の野守はけふやは春をしるらむ／

躬恒集三二六

*春日野の若菜の種はのこしてん千歳の春もわれぞつむべき／伊

勢集二〇四

*春日野の若菜も君をいのらななたがためにつむ春ならなくに／

貫之集一七三

*春日野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり／

古今集一七

*春日野の飛火の野守いでて見よ今いくかありて若菜つみてん／

古今集一八

*春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ／古今

集二二

平安時代以前の『万葉集』『人麿集』『赤人集』『家持集』においては、「春日野」の植物として詠まれているのは「浅茅」（万葉一八八四）、「萩」（同一三六七）、「尾花」（同一二七三）、「梅」（同四二六五）、「藤」（赤人集二四九）など種類は多いが、「若紫」はおろか「紫草」の例歌もないのである。

それでは、紫草の産地として歌に詠まれているのはどこかという
と、『万葉集』では「蒲生野」（二〇〇）、「託馬野」（三九八）、「横野」（一一二九）などであり、平安時代では「武蔵野」に限られている。

* 武蔵野に生ふとし聞けば紫のその色ならぬ草もむつまじ／小町
集八三

* 紫のひとつとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る／古
今集八六七

「若紫」の用例は、『京極御息所歌合』以外では次の数例しかない。意味は〈若い紫草〉をいう場合もあるが、〈淡い紫の色彩〉をいう場合もある。

* 秋の野に色なき露はおきしかど若紫に花はそみけり／本院左大
臣家歌合一八（しをにの花の色）

* 武蔵野に色やかよへる藤の花若紫にそめて見ゆらむ／亭子院歌
合二九（藤の花の色）

* 武蔵野は袖ひつばかりわけしかど若紫はたづねわびにき／後撰
集一一七七（若い紫草）

* まだきから思ひこき色にそめむとや若紫の根をたづぬらむ／後
撰集一二七七（若い紫草）

ここで、「春日野の若紫」と詠んでいる『京極御息所歌合』の例を見てみよう。この歌合は延喜二一年（九二二年）に京極御息所襲子（時平女）が、宇多法皇とともに幼い皇子（九二〇年生）を伴って春日神社へ参詣した折に、大和守藤原忠房から献じられた歌と、女房達の返歌を合わせたもので、問題の歌は皇子へ奉られたものである。

宇多法皇は晩年に得たこの寵愛の雅明親王を、醍醐天皇（宇多皇子・八八五年生・八九七年即位・高藤女胤子腹）の猶子にしている。当時、皇太子は醍醐天皇の皇子保明親王（九〇三年生・九二三年薨・基経女穩子腹）だったが、まだ次の寛明親王（朱雀天皇・九二三年生・穩子腹）は生まれていない。

宇多法皇は外戚藤原氏の勢力増大を嫌っていたが、藤原氏を外戚に持つ雅明親王の誕生は基経、時平の死後で、後を受けた忠平には入内させる女子がいなかった。そこで、法皇は雅明親王の後見人として再び権勢を得ることを考えたのだろうか。雅明親王が皇太子の控えとして期待されている様子が、この歌合から窺える。

十宮の御車に入れたる

* ことしよりはひそむり春日野の若紫に手でなふれそも／京
極御息所歌合四〇

* 紫に手もこそふるれ春日野の野守よ人に若菜つますな／同四一
* ちはやぶる神もしらむ春日野の若紫に誰か手ふれむ／同四二
四〇番と四二番歌の「若紫」は、幼い雅明親王のことを指している。藤原氏の氏神である春日神社に守られるべき皇子として、標野の春日野に生え初めた大切な紫草であるよ、の意を込めているのであろう。これらは、「年ごとに若菜つみつる春日野の野守はけふやは春をしるらむ」（躬恒集三二六）などの「春日野の若菜」の歌が土台にあつて、上記の春日詣が若菜摘みの時期を外れた三月だった

ので、季節に合わせて「若紫」に変えたのではないだろうか。

『伊勢物語』初段との先後関係は微妙だが、清水好子氏は『伊勢物語』の「春日野の若紫」を踏まえた上での作歌であるとされる。²⁾

そうであるなら、内容よりも言葉遣いを踏襲したのであろう。

では、『伊勢物語』がそれまでに用例のない「春日野の若紫」という語を使ったのはなぜか。それは、源融の「みちのくのしのぶもぢずり」歌から発想を得て、「しのぶの乱れ」心を詠もうという構想が先にあつて、作者の作った物語の主人公と、場面と、事件に沿つて歌が詠まれたからではないか。

物語は、「初冠して」「しのぶずりの狩衣」を着た男が、「春日の里」で、「なまめいたる女はらから」を見て「心地まどひ」をしたというものである。そこで歌は、まず「みちのくの」ではなく「春日野の」とした。次に「若紫の」としたのは、「すり衣」に懸けるために、衣の色合いを表す語をもってきたものと思われる。

「すり衣」は他の用例を見ると、布にいろいろな草花の色を摺りつけて染めた衣のようである。

* つき草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも／万葉

集一三五五

* 住吉の浅沢小野のかきつばた衣に摺りつけ着む日しらずも／同

一三六五

* 苗代のこなぎが花を衣に摺りなるるまにまにあぜか愛しけ／同

三五九八

* 恋しくはしたにを思へ紫の根摺りの衣色にいつなゆめ／古今集

六五二

草葉や花の色で摺り染めたものは、褪せやすかつたようである。

一方、紫草は根を染料とし、媒染の椿の灰で色を定着させ、色を何度もかけて濃くすることのできる貴重なものであつた。従つて歌では、深い愛情を表す時に紫草が使われている。

* 託馬野に生ふる紫草衣むらさきに染めいまだ着ずして色に出でにけり／

万葉集三九八

* 韓人の衣染むといふ紫の心に染みて思はゆるかも／同五七二

* 紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る／古今集

八六七

* 紫の色濃きときは目もはるに野なる草木ぞわかれざりける／同

八六八

* 恋しくは下にを思へ紫の根ずりの衣色に出づなゆめ／同六五二

『伊勢物語』における「春日野の若紫のすりごろも」は、物語の上から見ていくと、「春日野」に住む「いとなまめいたる女はらから」を一目見た男が、「衣染むといふ紫」（万葉集五七二）が「心に染み」（同歌）こむような恋をしたことを表している。恋の芽生えである。そこで「春日野」と「紫草」の語を使って歌を詠むのだが、

「紫草」ではなく「若紫」としたところが、この物語の歌の斬新さ

になつてゐる。

「若紫」の「若」は、「春日野の若菜」（古今集一九他）と同じく、紫草の芽生えたばかりのものをいう。ここは、「心に染み」（万葉五七二）た恋の芽生えを表すために、ただの「紫草」ではなく「若紫」という新しい語を創造したのではないかと考へる。

また、この「若紫」は「初冠」したばかりの若い男の「すりごろも」の色彩をも表している。その薄紫色の「すりごろも」が、融の「しのぶもぢずり」歌を下敷きにして、初恋の「しのぶの乱れ」の序となつていくのである。

このように『伊勢物語』の歌の言葉遣いは、物語の状況に合わせて創造されており、従来 of 歌の言葉遣いを無視して自由自在である。従来の言葉遣いの無視は、借用している源融歌の中でも平然と行つてゐる。融歌は、『古今集』（七二四）では第四句が「乱れむと思ふ」となつてゐるのだが、『伊勢物語』の作者は衣をへ乱れ染むと、心がへ乱れ初むの二つを懸けたいがために、「乱れそめにし」に変えてゐるのである。

他の段になるが「春日野」の歌の関連でついでにいへば、『古今集』に「春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」（一七）とあるのを、第十二段では物語文の「武蔵野へ率て行く」に合わせて、「春日野」を「武蔵野」に変えてゐる。

『伊勢物語』にとつて既成の歌は、物語の発想を得るための手掛

かりだつたのではないだろうか。既成の歌を自分の物語の構想に合わせて自由に展開させ、独自の言葉遣いで歌と物語を創造してゐるのである。

二、「ひじきものには袖をしつつも」

第三段の歌「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも」は、男が懸想した女に「ひじき藻」を贈り、それにひつけて恋心を表したものである。「ひじき藻」を「ひじきものには袖をしつつも」の中に詠みこんだ、いわゆる物名歌だが、言葉遣いとしてこなれておらず意味がわかりにくい。

物の名を詠みこむ時、例えば鶯を詠みこんだ「心から花の雫にそぼちつつ憂く干ずとのみ鳥の鳴くらむ」（古今集四二二）のように、少々の無理は仕方がないとはいへ、ここはなぜ無理をして「ひじき藻」を詠み込む必要があつたのだろうか。物名と歌の内容とは関連がなくてもよいとされているが、贈物に「ひじき藻」を選んだのは、男にそれなりの理由があつたのではないかと思われる。

元来、「ひじき藻」を詠んだ歌は珍しく、他に見あたらない。しかし、「藻」そのものは『万葉集』に、男女の靡き寄るさまや、共寝のさまの譬えとして数多く詠まれてゐる。

*……荒磯にぞ玉藻は生ふる玉藻なす靡き寝し子を深海松の深め
て思へどさ寝し夜は……／万葉集一三五

*……玉藻なす靡き我が寝し敷栲の妹がたもとを露箱の置きてし
来れば……／同一三八

*敷栲の衣手離れて玉藻なす靡きか寝らむ我を待ちかてに／同二
四八七

*紫の名高の浦の靡き藻の心は妹に寄りにしものを／同二七九〇

*さ寝には誰とも寝ねど沖つ藻の靡きし君が言待つ我れを／同
二七九二

*わたつみの沖つ玉藻の靡き寝む早来ませ君待たば苦しも／同三

〇九三

その中で、「玉藻なす靡き我が寝し敷栲の妹がたもとを……」（一
三八）や、「敷栲の衣手離れて玉藻なす靡きか寝らむ……」（二四八
七）の歌などから、「玉藻なす靡き寝」が容易に「共寝に敷いた」
敷栲の袂」または「衣手（袖）」という語を導き出すことがわかる。
従って、『伊勢物語』が「ひじき藻」を使ったのは、「藻」の連想
から「敷栲の袖」を導きだし、へ袖を引き敷きものにして共寝をし
ようゝということを言いたいがためであろうと考える。上句の「思
ひあらば律の宿に寝もしなむ」の「寝（共寝）」と合わせて、「藻」
と「袖（敷物）」を組合わせて使うことを、『万葉集』に習ったも
のであろう。

しかし、『万葉集』でへ袖を敷いて寝るゝというときは、「袖交ふ」
「袖返す」「袖巻く」などという言い方であって、「袖敷く」ではな

いのである。

*白栲の袖さし交へて靡き寝しわが黒髪のみ白髪になりなむ極み
……／万葉集四八四

*……相見ねばいたもすべなみ敷栲の袖返しつ寝る夜おちらず夢

には見れど……／同四〇〇二

*ま日長く川に向き立ちありし袖今夜まかむと思はくがよさ／同
二〇七七

「袖敷く」と「敷く」の語を用いた言い方は、共寝ではなく寂し
い独り寝を表すものとして、「袖片敷く」が一例と「衣片敷く」が
少数例あるのみである。

*……別れにし妹が着せてしなれ衣袖片敷きてひとりかも寝む／

万葉集三六四七

*我が恋ふる妹は逢はさず玉の浦に衣片敷きひとりかも寝む／同

一六九六

*妹が袖別れし日より白栲の衣片敷き恋ひつぞ寝る／同二六一三

*さむしろに衣片敷きこよひもや我をまつらむ宇治の橘姫／古今

集六八九（よみ人しらず）

平安時代になると「袖」は、へ濡れるものゝへ振るものゝへ匂うもの
のゝへ包むものゝなどと詠まれるだけで、へ袖を敷物にして寝るゝと
いう意味の歌は、この『伊勢物語』の歌以外にはないのである。

*袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ／

古今集二

*限りなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかはかじ逢はむ日までに／同

四〇一

*春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ／同二

二

*折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯のなく／同三二

*包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり／小町集

三九

*大空をおほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせし／寛平

御時后宮歌合二四

『伊勢物語』では、当時の「袖」の詠み方としては使われなくなつ

たへ袖を敷いて共寝をしようの歌を作つて、わざわざ「ひじき藻」

とともに贈つたのであるが、万葉時代の「靡き寄る藻」ではなく

「ひじき藻」を使ったのは、次のような理由によると考える。

『万葉集』の「靡き寄る藻」は、深い海底で波に揺られてしなや

かに靡く藻をいい、男女の靡き寄るやさしさを表している。

一方「ひじき藻」は、『大言海』に「長サ二三寸、鼠尾ノ如ク」

とあり、海藻学に詳しい岡村金太郎氏の『海藻譜』によると、三十

センチから一メートルまで伸び、丸みのある茎の周囲から太く短い

棍棒様の小枝がかたまつて出て、その小枝の周囲にまた同じような

小枝がかたまつて出てくる形状で、浅い岩礁に生え、潮が引くと海

上に出てしまふ、とあるので波に靡き揺れることは少ないであらう。

このような硬い「ひじき藻」に、靡かない女のさまを表したので

ある。男はまだ靡いてくれない女に向かつて、「思ひあらば葎の宿

に寝もしなむ……」と歌を詠みかけたのである。

上句の「葎の宿」は、平安時代の歌には用例が少ないが、『万葉

集』に次のような例がある。荒れ果てた粗末な家のことだが、大切

な人を迎え入れる時の自分の家をいう。

*いかならむ時にか妹を葎生の汚き宿に入れいませてむ／万葉集

七六一

*思ふ人来むと知りせば八重葎覆へる庭に玉敷かましを／同二八

三五

*玉敷ける家も何せむ八重葎覆へる小屋も妹と居りてば／同二八

三六

*葎延ふ賤しき宿も大君のまさむと知らば玉敷かましを／同四二

九四

『伊勢物語』の「葎の宿」は、男が女より身分の低いことを暗示

している。そして後文で、女は若い頃の二条の後だと明かすことに

よつて、歌だけでははつきりしなかつた男と女の関係を具体化して、

物語性を拡大しているのである。男は身分差のために、女になかな

か近寄れなかつたのだ。

歴史上の二条の後高子（藤原長良女・基経妹）は、九歳年下の幼

い清和天皇（八五〇年生・同年立太子・八五八年即位）に入内することが早くから決められ、后がねとして長く待たされていた。その間に他の男との恋愛事件があつても不思議ではない。こども、その一つであるという書き方である。

歌の意味は（身分違いでも貴女に愛さえあれば、玉藻が靡くように私の所に来て、お互いの袖を敷き合つて共寝でも何でもできるのですよ）というのであろう。『万葉集』に抛りながらも、既成の言葉遣いにこだわらず、「ひじき藻」を使うことによつて発想を転換し、まだ靡かない女へ誘いかける自在な歌になつてゐる。男の「靡き寄る藻」への願望が「ひじき藻」に込められているものと考えらる。

三、「塩竈にいつか来にけむ」

初段に引かれた融歌と関連するのは、第八十一段の話である。源融の六条邸は、たいそう風流に造られていた。ある菊花紅葉の宴が行われた明け方、招客は風流な邸を誉める歌を詠んだ。最後に「かたる翁」が板敷の下を這い歩いたのち、「塩竈にいつか来にけむ朝なぎにつりする舟はここに寄らなむ」という歌を詠んだ。六条邸を絶景陸奥の塩竈と錯覚して、自分はいつのまに塩竈に来たのだらう、と感嘆した歌である。

ここにいう（塩竈の眺め）とは、沖に島々が浮いている松島湾の

絶景のことである。『大日本地名辞書』（吉田東伍著）や『日本地名大辞典』（角川書店）によると、多賀城に隣接する塩竈は、その奥に位置する松島より古くから開けていて、松島湾の絶景は（塩竈の眺め）として有名になつたようだ。

「塩竈」の名が歌に現れるのは『古今集』や『伊勢物語』の頃からである。ちなみに、陸奥の「松島」の名が最初に見られるのは、長保年間に没した源重之の家集である。従つて「塩竈」に見まごう融邸とは、松島湾の絶景を思わせる、島がいくつも浮いている広い池からなつていた、と考えねばならない。

実際に、融邸の六条河原院が塩竈の景を模していたかどうかを実証する資料は、後掲する『古今集』の貫之の歌しか見あたらない。『本朝文粹』にある河原院の詩には、幽遠で風流であることを表す「煙霞」「風煙」などの語は見られるが、「塩竈」のことは出ていない。

そもそも、陸奥の「塩竈」を詠んだ歌は多くはない。『万葉集』には一首もなく、家持に贈られた山口女王の歌というのが『新古今和歌集』に載っている（同歌は『古今和歌六帖』にもある）が、全般に平安時代になつてから詠まれるようになったと考えてよいと思ふ。

河原左大臣の身まかりて後、かの家にまかりてありけるに、塩竈といふ所のさまをつくれりけるを見てよめる 貫之

*君まさで煙たえにし塩竈のうらさびしくも見え渡るかな／古今
集八五二

*陸奥はいづくはあれど塩竈の浦こぐ舟の繩手かなしも／同一〇
八八・伊勢集三九〇

*わが背子を都にやりて塩竈のまがきの島のまつぞ恋しき／古今
集一〇八九

*塩竈のいそのいさこをつつみもてみよのかずとぞいのるべらな
る／忠岑集一五三

*ひとりぬるわがしきたへは塩竈のうきたまなれやよるかたもな
き／同一五五

*塩竈の浦こぎいづる船の音はききしがごとくきくはかなしや／
伊勢集二一〇

*塩竈の浦こぐ船の音よりも君をうらみの声ぞまされる／同一一
*塩竈のまへに浮きたる浮島のうきておもひのある世なりけり／

新古今和歌集一三七九（山口女王）

これらの歌は、塩竈の浦を漕ぎゆく船の悲しきや、沖に浮かんで
いる島々の寂しい風景を詠んだものである。「塩竈」は地名であり、
寂しさや悲しさを詠むための景として扱われている。ただ一例、融
邸のことを詠んだ『古今集』の貫之の歌は特異である。ここで貫之
の歌を詳しく見てみたい。

貫之は、融の晩年二十五年程の時代を共に生きている。従って、

融邸の盛況を見聞きして、融亡き後の邸の荒廢のさまは感慨深
かったであろう。歌の詞書に融の死後、邸へ出かけて行き、「塩竈
といふ所のさまをつくれりけるを見て」とあるから、塩竈浦のよう
に造られた池庭を見て、歌を詠んだということになる。『貫之集』
に「塩竈といひし所のさまの荒れにたるを見て」（七七二）とあつ
て、その庭がすっかり荒廢していたことがわかる。

歌はへ塩竈の景の庭が、君がいらつしやらなくなつて煙が絶えて
しまったように荒れ果て、うら寂しく、はるばると見渡せることだ
という意であろう。古来、この「煙たえにし」をへ塩焼く煙」と解
釈されているが、はたしてそうだろうか。

頭昭の『古今集註』には、「……池ニ毎月ニ塩卅斛ヲ入テ海底ノ
魚蟲ヲ令住之由清輔所注也……隆国卿注者、作陸奥塩竈形、汲湛
潮水云々。〔頭書〕良宗案、其家庭塩竈之潮水、使役夫数百人毎日付
攝之尼前浦相繼運之云。」と、池にわざわざ潮水を入れていたよう
に書いてある。註中に引く陸国は融没後百年、清輔は二百年後に生
まれているのだから、書かれてあることをにわか信じていることはで
きないが、ここには塩を焼いたとは一言も書かれていない。

ところが、定家の『頭註密勘』に「……いみじき家つくり池をは
り、水をたゝへて、うしほ毎日三十石まで入て、海底の魚貝等を住
しめたり。陸奥國しほがまの浦をうつつして、あまのしほやにけぶり
をたゝせてもてあそばれけるが、彼大臣うせられて後、しほがまの

けぶりたえたるをみて、貫之のぬしよめる歌也。……」とあって、

こちらあたりから融が塩竈の浦を摸した庭で、塩を焼かせて煙を立てたせていた、ということになったようだ。「塩竈」の視点が、沖に浮かぶ島々から浜の塩を焼く「竈」に移され、景が狭くなりよい解とは思えないが、後代に強く影響を与えている。

契沖の『古今餘材抄』は「……頭注に池をほり水をたたへて、うしほ毎月三十石まで入て、海底の魚貝等をすましめたりと有。うらさひしくは浦に裏をそへたり。裏は心也」とあって、これは塩を焼いたとは言っていない。

宜長の『古今集遠鏡』には、「君ノゴザナサレヌデ 塩モヤカネ
パ 煙ノタエテシマウタ此シホガマノ浦ハ カウ見ワタシタトコロ
ガマア 物ガナシウサビシウ見エル事カナ」とあって、『頭註密勘』を受けて、融は塩を焼かせていたことになっている。

ここで、「煙」を詠んだ他の歌を内容で分類してみると、次の五つとなる。①煮炊きの煙、②塩焼く煙、③思ひに燃える煙、④火葬の煙、⑤山の煙その他。

貫之の歌で考えられる煙は、「塩竈」の語から「塩焼く煙」か、「身まかる」から「火葬の煙」か、或は「君まさで」から「煮炊き（生活）の煙」であろう。

まず「塩焼く煙」で考えてみると、他の用例では歌中に「塩焼く煙」「煮塩焼く煙」と、必ず「塩焼く」という語が使われている。

従って、「煙」としかない貫之歌は、塩を焼く煙ではないと考えられる。

* 縄の浦に塩焼く煙夕されば行き過ぎかねて山にたなびく／万葉集三五七

* 志賀の海人の塩焼く煙風をいたみ立ちほのぼらず山にたなびく／同一二五〇

* 浦近く立つ朝霧は藻塩焼く煙とのみぞあやまたれける／興風集三七

* 藻塩焼く海人のたく火の煙こそ思ふ方には立ちのぼりけれ／躬恒集一七三

次に「火葬の煙」の用例を見ると、「煙」は故人を思い出すようになった。貫之歌は「君」（融）その人を詠んだ歌ではないから、融の火葬の煙のことではないであろう。

* うつせみはからを見つともなぐさめつ煙だに立て深草の山／遍照集一三

* 立ちかへりかなしくもあるかな別れては知るもしらぬも煙なりけり／貫之集七七九

* はかもなき世を捨てはてし人しもぞ煙となりて先に立ちける／斎宮女御集七三

「煮炊き（生活）の煙」の例は『万葉集』にしか見当たらないが、「君まさで煙たえにし」は、融亡きあと煮炊き（生活）の煙が絶え

てしまった邸の、人氣のないさまをいうのではないだろうか。

*……天の香具山登り立ち国見をすれば国原は煙立ち立つ……／

万葉集二

*春日野に煙立つ見ゆをとめらし春野のうはぎ摘みて煮らしも／

同一八八三

貫之歌の「塩竈」は前掲の他の例歌同様、塩を焼く竈をいうのではなく、塩竈の浦の風景と取るべきであろう。「煙たえにし」は「塩竈」の縁語として用いたもので、人氣のなくなった「うら寂しさ」を引き出す語となっている。その「うら寂しさ」は、「塩竈の浦」の「うら」を懸詞にしてうまく導き出されているのである。

* * *

さて、貫之歌が融邸のうら寂しさを、塩竈の景で表していることが解ったところで、『伊勢物語』の塩竈の段に戻る。

「翁」は融邸で「塩竈」の歌を詠む前に、「かたる翁、板敷の下にはひありきて」という理解しがたい行動をしているが、これによって塩竈に来たという錯覚状態を表しているのではないかと考える。錯覚状態で歌を詠むという話は第七十七段に既にある。女御多賀幾子の法事の時、捧げ物が多くて御堂の前に山が移動してきたように見えたので、翁が「目はたがひながら」錯覚状態で歌を詠んだとあった。

「かたる翁」については、祝いわい人説、卑下説等いろいろな言われて

いるが、素直に本文に沿って読んでいく。「かたる」の例は、『土左日記』に、天氣の子測を誤って船を出さなかった楫取りを嘲り罵って、「日もえはからぬかたるなりけり」（二月四日）というのがある。

また、『宇津保物語』には正頼大臣が、入内させた「あて宮」を里下がりさせられないのに腹を立て、自分を嘲って「女子持ちたらむ人は、よき犬かたるなりけり」（葦開・下）と言っている。両例から「かたる」は、嘲笑されるような行動をする人を罵倒する言葉と解される。従って、「翁」の板敷の下を這い歩く行動は、人から嘲笑されるような異常な行動だと思われる。

一方、「かたる」は本来の乞食、傍居かたみ人の意から、招客が「親身たち」である「ひだりのまうちぎみ」の邸宅においては、主人公の身分が非常に低いことを表している。それで、身を屈めて「這ひ歩いたり、「人にみな詠ませはてて」最後に別枠で歌を詠むことになったものと思われる。

では、「かたる翁」が板敷の下を這い歩いたのは、なにを意味するのだろうか。それは、融邸の庭を絶景塩竈の浦に見立てて、その浦を「かたる翁」が海人さながら徘徊しているさまを表しているのではないか。「塩竈にいつか来にけむ朝なぎにつりする舟はここに寄らなむ」の、歌の効果をあげるための主人公の演技である。

すなわち、融邸を塩竈の浦と錯覚して、低い身分の海人さながら徘徊する奇怪な行動の主人公を、嘲笑を込めて「かたる翁」という

語で表したのである（今、「翁」の意味は問題にしない）。後文によれば、「翁」は日本国中で陸奥の塩竈ほどすばらしい所はないと思つてゐるといふ。そのすばらしい塩竈に今現在ゐるようだと云つたのだから、「翁」は融邸の風流を最高に誉め讃えたことになるのである。

「塩竈」の歌の前には融邸について、「家をいとおもしろくつくりて住みたまひけり」、「この殿のおもしろきをほむる歌よむ」とあるだけで、邸と塩竈との関連については何も述べられていない。また、「人にみなよませはてて」といふ「みな」の歌は出ていないが、「翁」が初めて融邸を塩竈と関係付けて誉めたのであろう。

なぜ塩竈かという説明は後文でしてゐる。日本国中に陸奥の塩竈ほど「あやしくおもしろき所」はないから、融邸を「さらにめでて、塩竈にいつか来にけむ」と詠んだのだといふ。

すなわち、融邸は日本一めでたい塩竈に匹敵するというのだ。翁が、そのめでたい塩竈に来てゐるのではないかと錯覚するくらいに、融邸はすばらしい所だといふのである。

歌は、翁が錯覚したまま、塩竈ならば沖合にゐるはずの釣舟に向かつて、へ朝なぎの今、ここ（塩竈＝融邸）に寄つて見てほしい。日本一めでたい所だよ」と呼びかけてゐる体である。融邸の風流を誉めるに、これほど意表を突いた風流な詠み方はないであらう。

融邸の風流を陸奥の塩竈と関連させたものは、管見の限りでは

『古今集』の貫之の「塩竈」歌と、『伊勢物語』のこの段の話しか見当たらない（『在中将集』『業平集』は『古今集』『伊勢物語』の業平歌を基にしたものなので今は問題にしない）。両者とも塩竈の景によつて融邸の風流を詠んでいて、片や荒廃のさま、片や盛時のさまと対応している。塩竈の歌例の中で、この二首だけが融邸の歌である。従つて、二首は影響しあつてゐると見てよいであらう。

そうなると、八十一段の物語は、『伊勢物語』の作者が、融邸の荒廃した寂しさを詠んだ貫之の歌に呼応して、盛時の様子を再現して見せたものと考えられる。貫之の歌が融邸の荒廃した寂しさを塩竈の浦の寂しきで表現してゐたのを転換して、融邸の浮島の多い池庭を浮島で有名な塩竈の絶景に見立て、そこで行われたであらう宴の一場面を作り上げたのである。

歌は『続後拾遺集』に業平朝臣歌とあるだけなので、『伊勢物語』の作者がこの段のために作ったものと思われる。『古今餘材抄』で契沖が、貫之の「塩竈」歌を、「伊勢物語に業平のここにて、塩かまにいつかきにけむとよまれたる歌かけける一段をもて、そのあれての後のさまおもひやるへし。」と言つてゐるのは、この二つの呼応関係を感じてのことと思われる。

結び

今回は、『伊勢物語』のために作られたと考えられる作中歌の中から、「若紫」「ひじき藻」「塩竈」の三語を取り上げ、各語が歌の中でどのように使われているかを調べてみた。これらは、和歌史の流れの中にあつて、『伊勢物語』の作者の強い意思によって、新しく作り直された歌語といつてよいと思う。

このような斬新な歌語を自在に作れるのは、作者が歌の常套に縛られていないためであり、それは自由が許される物語の中の歌だからであらう。物語はもともと新奇創造の世界である。

私は、『伊勢物語』の歌の着想の斬新さは、言葉遣いの常套をはずすという、いわば破格性にあると考える。「春日野の若菜」ではなく「春日野の若紫」、「靡く藻」ではなく「ひじき藻」、「塩竈のうら寂しさ」ではなく「塩竈のめでたさ」というように、既成の歌の常套を離れ、発想を転換することが物語の創造に発展しているのである。いふなれば、このわざと常套をはずす破格志向が、『伊勢物語』の創造の源になっている、と考えるのである。

[注]

- (1) 『日本古典文学大辞典』(市古貞次他監修・岩波書店)や『伊勢物語』(大津有一、築島裕校注・日本古典大系・岩波書店)の解説に従う
- (2) 『一冊の講座伊勢物語』所収『伊勢物語と物語文学』清水好子・有精堂
- (3) 『大言海』大槻文彦著・富山房
- (4) 『海藻譜』『日本の食文化大系』第七巻・岡村金太郎著・東京書房

社

- (5) 『本朝文粹』「新訂増補国史大系」巻二九下・吉川弘文館、巻一「奉同源澄才子河原院賦」源順、巻九「秋日於河原院同賦山晴秋望多」藤惟成、巻十四「宇多院為河原左相府没後修諷誦文」紀在昌
- (6) 『古今集註』『日本歌学大系』別巻四・久曾神昇編・風間書房三二七頁

- (7) 『頭註密勘抄』『日本歌学大系』別巻五・久曾神昇編・風間書房二五三頁
- (8) 『古今餘材抄』『粟沖全集』第八巻・岩波書店五一七頁
- (9) 『古今集遠鏡』『本居宜長全集』第三巻・筑摩書房二二六頁

[引用本文]

- 『伊勢物語』—石田稔二訳注・角川文庫
『万葉集』—伊藤博校注・角川文庫、青木生子他校注・日本古典集成
『古今集』—窪田章一郎校注・角川文庫、奥村恆哉校注・日本古典集成
『歌合集』—荻谷朴、谷山茂校注・日本古典大系
『新編国歌大観私家集編』—角川書店
『土左日記』—鈴木知太郎校注・日本古典大系
『宇津保物語』—河野多麻校注・日本古典大系

〔付記〕

本稿は、平成五年度広島大学国語国文学会秋季研究集会において口頭発表したものを、再考察して纏めたものです。席上、位藤邦生先生・小川幸三先生ほかの皆様から貴重なご助言を賜りました。また、論を成すにあたり、改めて位藤先生と妹尾好信先生から、懇切なご教示を賜りました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

稲賀敏二先生には、終始暖かいご指導と励ましのお言葉を賜りました。心より感謝申し上げます。

—— かまた・きよえ、元広島大学文学部研究生 ——